

ロゴス・プネウマティコス

わたしは、溺れているのか浮かんでいるのか、旋回しているのか流れているのか、……なるほどたしかに旋回や流動という事態はあるが、その旋回や流動のなかに、特に何かが溺れたり浮かんたりしているのかどうか、わたしという名を負った者などが溺れるにせよ浮かぶにせよそもそもあるのかどうか、そんなことは、いまだはもうわからなくなってきた。そんな名を負った者よりも、……言うなれば絶えず凝集し散乱する光や大気や水や土の粒子のようなものがある。あるいは、もっと適切な語り方をするなら、絶えざる凝集と散乱の活動だけがあり、旋回と流動の活動だけが、ある。そのほかに……何か、あるだろうか……、旋回したり流動したりするものが何か。……むしろ旋回が流動し旋回し、流動が旋回し流動しているのではないだろうか。何にせよ、凝集や散乱や旋回や流動は、光や水や大気や土の活発な粒子のことだと言うわけにはゆかないし、光や水や大気や土の絶えざる活動と呼んで済ませることもできず、さりとてまた単純にわたしと呼んで、あるいはもう少し哲学的に絶対精神とか絶対的自我とか知的直観とか、さらには actus purus とかタオとかブラフマンとか、好みの名で呼んで、それでおしまいとい

うわけにもゆかない。でも、たしかに、ある。……絶えざる凝集と散乱と旋回と流動が、ある。

このたしかな存在、活動、現実が、いま、……わたしと風が語りあうこの場所から、現成する。

いま、わたしに風が吹く。

風にふれるわたしの顔は

わたしの素顔にふれられる。

こんな経験は……何度も……あった。でも、いつも
気にもとめずにすぐ忘れてしまった……ことを、
想い出す。

仮面と、身体と、人間と、
わたしが、いま、こわれてゆく。

人間はこんな風にして自分にふれる。
間断なく吹きつける風が

北岡 崇

道や家屋や樹木や水面に、一瞬

ふれては去ってゆくように、人間も

風と一つになつて

自分自身に一瞬ふれてはたちまち

去ってゆく。

ほんの一瞬のことなのだ……人間が

自分自身をたしかめるのは、つまり人間が

自分自身に出会つて、それを生きるといふことは。

人間という原野を広くまた深く開拓するようにと人間を励ましつづけた思潮、ヒューマニズムは、その上げ潮どきの大波によつて、かつていくたびも人間の歴史の浜辺に、人間と呼ぶより怪物と呼ぶのがふさわしい数多くの驚異的な畏るべき天才たちをうちあげたことがある。まさしくそれらの怪物たちによつて、ヒューマニズムの威光が高められたのである。人間の原野にひそむ謎に直面しつづけた彼らのうちのたった一人だけでも、その思想にふれば、ふれた人間は、自分自身に出会つてそれを生きるといふことがどういふことであるのか考えはじめるにちがいない。彼らが見た謎、彼らの心に焼きつき、彼らの思想に浮き出た謎が、その思想にふれた人間を、考えることへと誘うからだ。しかし、現代、つまり人間の歴史においてヒューマニズムという題目がいままでになく意味ありげなものとして流通する現代、ヒューマニズムの思潮は確実に引き潮に転じ、その題目のもとに群がる人々は、その大多数が、人間の原野を開拓しようとはしなくなつてしまった。あの怪物たちの名声にあやかるうとする人や、威光ある題目のもとに保護と安全とさらには利益を

求めようとする人や、心中のやましさと不安を忘れようとあぐ人や、その他、等々、いまだきのヒューマニストは、その大多数が、置き去りにされた潮だまりや小さな渦のなかでぶつ……ブクブク……つぶやくばかり。声を張りあげて叫ぶ者もいる。……人間の生来の権利、人間らしい生活を営む権利、……彼らの言によればもちろん人間らしい生活を構成する要件は少なくない、またその数は日ごとにふえてゆく、何しろ社会がとて複雑になつてゐるから、……その各々に対してそれを享受する権利、権利、権利、権利、権利、……とめどなく欲望される権利。何であれ自分の欲望を充足したければ、ヒューマニズムに訴えよ。いつからだろうか……、ヒューマニズムという題目がこんなにも力をふるい、にもかかわらず人間という原野がこんなにも荒れさび瘦せ衰えてしまつたのは。いつからにせよ、それは、ヒューマニズムがその誕生のときからそのなかに温存しつづけてきたエゴイズム、すなわち人間中心主義というエゴイズムが大勢の人々の心をつかみ、大勢の人々によつて、望ましい生活信条、都合のいい処世術として認められるようになって以後のことである。そのとき以来、大多数のヒューマニストたちは、人間を、人間一般についての一定の共通理解のうちに囲い込もうとしてきた。それは同時に、彼らが、人間という原野の開拓を拒みそこにひそむ謎への洞察力を次第に弱めてゆくプロセスでもあった。そしてこのプロセスに併行して、ヒューマニズムは、人間一般についてますます強化される共通理解を盾にとつて、人間中心主義としての、また人間帝国主義としてのその特性をますます前面に押し出すようになった。こうして、いまでは、ヒューマニストは、その圧倒的多数がエゴイストであり利己主義者である。自分の欲望

を充足したければ、ヒューマニズムに訴えよ。しかしそれでも、ヒューマニストにせよエゴイストにせよ、彼らが人間や自分自身を見出しそれを生きたことができるなら、あるいはそうして発見された人間や自分自身に何か貴重なものをもたらすことができるなら、……それでも……よいのだが……。だが、実際には、ヒューマニストにせよエゴイストにせよ、彼らの大多数は、奇妙な思いがいをしている。つまり、大多数の人々は、人間の素顔も自分自身の素顔もはっきりとは知らないくせに、それを十分に、そう、彼らの言う人間らしい社会生活をつづけてゆくには十分に、知っているつもりでいるのだ。彼らが人間と言いつつ自分自身と言いつつ、彼らはいつでも勘ちがいでいる。彼らは、彼らが所属する社会で認められた、人間一般や自分自身についての意見、半ば非人間的な、また半ば非個人的な共通理解のなかにとどまっているからだ。人間や自分自身を開拓すれば、そんな中途半端な共通理解へのアンチテーゼとして、真なる人間（真人）や真なる自分自身を、あるいは少なくとも人間や自分自身という存在に真に具わる謎を、対置することもできるだろうに……。いずれにせよ、そんな共通理解にとどまっている以上、彼らが人間のために、また自分自身のためにと考えて、何を語ろうとも、どんな配慮をおこなおうとも、どんなふうに行動しようとも、それらは全部、勘ちがいのうえになされることになる。彼らは、人間のために自分自身のためにも何一つおこなうことができず、人間や自分自身についての幻影のためになることばかりおこなう。現代、ヒューマニストやエゴイストや利己主義者は、その大多数が、一生涯、人間や自分自身のためになることを何一つおこなうことができない。人間にも自分自身にも、貴重なものを何一つ与えること

ができない。だから、いまではもう、ヒューマニズムは、そしてエゴイズムや利己主義は、とりちがえられた人間への執着、とりちがえられた自分自身への執着という意味以上の意味をほとんどもちえなくなっている。通常の意味での人間や個々人が救われたとしても、それだけではどうしようもない時代に突入してしまった^三いま、現代のヒューマニズムや、これと一体になったエゴイズムは、わたしをどこにも導いてはくれない。

individualということばがある。個々人を、それ以上は分割できない究極の存在として理解せよとすることばである。だが、このことばも、個々人についての勘ちがいに由来することばではないだろうか……。事実、人間は、誰であれ単独では、それ以上は分割できない究極の存在といったものではない。どのような個人も単独では決して individual ではない。個人としての人間は、たとえばいまのように、ここに吹いてくるこの風と一つになるという事態へと解体され解消してゆくときはじめて、自分自身を想い出す。

間断なく贈られる恵みの時にはぐくまれ、

子供の眼のように澄みきったこの空間で

生の歩みをたゆみなく歩み、

その歩みが歳をとることとピタツと重なるように

時が開けてゆくなら、

いつでも、かならず

吹く風の感触や、さらさらと流れる水の感触や

植物たちのかすかな呼吸や何かが

その人に、

このうえなく貴重なものをお届けしてくれる。

そんなときは

自分の存在の奥底の方まで、風や水や植物たちの

呼吸がしみとおっていることに気づく。

吹く風に手をかざしたり、小鳥の声に鼓膜がふるえたり、木陰に座って水のせせらぎに素足をひたしたり、そして緑陰にたちこめる清々しい水の匂いを吸ってみたりしたときに、人間なら誰でも一度くらいは、自分自身の存在に風や小鳥の声や水といった存在たちがしみとおっていることに、またそれらの存在たちへと自分自身が拡散していることに気づいたことがあるだろう。でも、自分自身が、風のそよぎや水の流れや小鳥たちのさえずりと一つであるというこの（浸透や拡散の）事態は、誰もがいつでもつねに気づき学び知っているというわけではない。事実、それらは一つであるし、そのような現実には絶えず現前しているのだが、そのことに気づいたりそのことを学んだり知ったりするのは稀なことであるらしい。冴えわたる大気や水や小鳥たちのことばをいつでもつねに聞き取り、そこにいだかれている存在をいつでもつねに受容することができると、……それはどこに冴えた意識は、めずらしい。ほんとうにめずらしいものだから、意識と呼ばれるたいのもののたちとは別物のそんな意識は、かえってむしろ無意識と呼ばれたりするくらいだ。だが、意識と呼ばれるものにも夢見る意識やねばけた意識があるように、無意識と呼ばれるものにも冴えわたった無意識というものがたしかにある。たとえば、瞑想。……それにしても、こんなに澄みきった大気に包まれて親しく風と語りあっていると、学問や科学の理論

やことばがむなしなものに思われてはこないか。

風よ、あなたとわたしはこんなにも寄り添って

睦ましく語りあう。

だが、わたしたちが伝えあう知恵は

あまりにも豊かなものだから、わたしたちは、もう

人間のことはなどには頼れない。

学者たちの論議は粗雑で

詩人たちのことばは濁っている。

わたしたちの親密な交流を導くのは

歌や微笑や気配や沈黙やエーテルを素材とする

霊のことばだ。

霊のことばにひたされていると、学問や科学の理論やことばのことを、正確であるとか、首尾一貫性があるとか、事実によって裏づけられているとか、現実と合致しているとか、信憑性がきわめて高いとか、客観的であるとか、等々、いろいろ言ってほめそやすのは、あのねばけた意識なのだというふうに思えてはこないだろうか。……あの意識は、正確さについて、首尾一貫性について、事実や現実について、証明や信頼について、また主観性や客観性について、語りはするが、いつも勘ちがいしている。その勘ちがいのままに、無邪気に、正確、事実、現実、証明……と語る。そして嘘をつく。悪意などなしに、素直に意見をそのまま述べるとき、それが嘘になる。

——でも、そんなことを言うあなた自身、やはり一個の学者であり科学者ではないのか。あなた自身、学問や科学の理論やことばを信頼しながら生活する人間の一人ではないか。それなのにあなたは、そのような理論やことばをむなしいと言い、そのような理論やことばをほめたたえる意識をねばけた意識と言う。わたしには、ねばけた意識が語るほめことばとしてあなた自身がとりまとめたことばは、どれもこれも、もつともだと思えるのだが……。正確さや実証性や客観性は学問や科学にとって必須の条件であるのに、あなたは、学問や科学を不正確だとか非現実的だとか言おうとするのか……。

わたしという名を負ったものがそもそもあるのかどうかあやしくなってしまうというのに、そのものを一個の学者であるとかないとか、科学者であるとかないとか言う言い方に、一体、どんな意味があるのだろうか……。あの種族に囲われて自分自身を忘れていたときならそのような呼び名にも何らかの意味を認めることができたのかもしれない。しかし、自分自身が、わたしの素顔が、仮面と身体と人間一般とわたしの彼方から想い出されてくるいま、そんな呼び名のことは、もう、どうでもいい。

仮面と、身体と、人間と、わたしが

いま、こわれてゆく。

ありとあらゆる呼び名が

いま、こわれてゆく。

学者にせよ科学者にせよ、それは、人が顔につける仮面でしかない。誰かがそれになりきったようにふるまうときでも、それは彼が仮面に素顔を奪われているだけのこと。だから、そんなとき彼は、かならず自分自身をとりちがえている。そして、自分自身をとりちがえる者は、かならず、いつでも、他者をもとりちがえる。そんな人の理解する主観と客観、主観性と客観性は、みな、妄想の産物だ。……なるほど、それでも、あなたにとっては、学問とか科学とか呼ばれるものに何か格別に重要な意味があるように思えるのだろうか……。わかった。それなら、その意味を重く捉えすぎるといふ偏狭な先入見からあなた自身を解き放つてあげようか、……もちろんあなた自身それが望むならのことだが。……と言うのも、人間はたいてい、おのれの心に思いつめた偏狭な先入見から解き放たれてゆくときには、自分が一切の価値を最終的に失ってしまうのではないかと不安になるものだから。一切の価値をはぎ取られてゆくような心細さ、不安、あるいは恥辱や苦痛や恐怖に、あなたは耐えることができるだろうか……。それに耐え抜くことができれば、あなたはそのとき、あなた自身に関する真理を血みどろのものとしてつかみとることになるだろう。あるいは、あなたに、何ものよりも真理を喜ぶ感受性が恵まれているなら、その稀な才能があなたを、辛苦に満ちたあらゆる試練の彼方に軽々と運びゆき、あなたに、あなた自身や事物の本体についての真理を贈り届けることであろう。だから、さあ、あなた自身の問題だ。とりあえずは、イスラームの神秘家、ジャラル・ツ・ディーン・ルーミー（一二〇七—一二七三）の語ったお話を耳を傾けてみてはどうだろう。あなたはあなた自身の存在を、成育しつつある一本の若木として確認できるかもしれない。す

べては、あなた次第だ、……あなたもまだ知らないあなた自身の問題だ。ルーミーは言う、……。

「或る王様が己が御子を一团の学匠たちに託して、天文、砂占い(砂上の線によつて吉凶を読む術)その他の諸芸諸学を習わせた。この王子、生来の鈍器で、どうにもしようのない愚物であつたにもかかわらず、遂にこれらの学に通曉するに至つた。或る日、王は一個の指輪を掌に握り、我が子を試そうとして、『さあ、当ててごらん、わしはいま何を握っているか』と尋ねた。『父上が握つておられるのは、何か円くて、黄色で、中が虚な物です。』『いかにも。この物の主な特徴は見事に言い当てた。ではその物自体が何であるか当ててごらん。』『飾に相違ありません。』これを聞いて王様は言われた、『ああ何ということだ。理性ある人々を戸惑いさせるに足るほど細かく特徴を指摘したお前が、その学識をもつてしても、飾が掌のなかには入らないという明々白々たる事実^{事実}に気づかなかつたのか』と。

当今の学者たちもまさにこれと同じ。彼らはさまざまな学問において益体^{えいたい}もない細部の穿鑿^{せんさく}に憂き身をやつし、自分に関わりのない事柄についてはこれを知り尽し、その蘊奥^{うんおう}を極める。が、一番大切なこと、他の何事よりも我が身に深く関わるもの、つまりおのれ自身については何も知らぬ。あらゆる物事の是非善悪は立派に判定し、『これはさしつかえない、これはいけない、これは正だ、これは邪だ』などと言うが、自分自身が善いか悪いか、正か邪か、純か不純かとなると一向にわからない。

(さつきの物語にあつた) 指輪についてそれが中空であることや、

金であることや、刻印のあることや、円形であることなど、これはどれも偶有的な性質にすぎない。試みに火のなかに投げ込んでみなされ。こんなものはすべて跡形もなく消え去つて、後にはいま挙げた一切の特徴を脱ぎ棄てた純粹無垢の本体だけが残る。いま、人々がいろいろと問題にする事物の外面的な特徴もまったくこれに異るところはない、学問であれ行為であれ、ことばであれ。そんなものは何一つその事物の本体とは関わりない。そういう外面的な特徴が全部消え去るとき、本体だけが残るのだ。学人たちの指摘する事物の特徴はいずれもこうした性質のものである。そういう外面的特徴を捉えて学人たちはああだこうだとあげつらい、解釈し、揚句の果てには『掌のなかにあるのは飾であります』式の判断を下す。これは彼らに物事の究極の真性が何であるかが全然わかつていないからである。』(『ルーミー語録』「談話 其の四」)。

ルーミーも語っていることだが、人間は学を身につけている場合でも自分自身や、事物・物事の究極の真性については何一つ知らないということがありうる。いや、それどころか、むしろ、知らない場合こそ多いと言つてもよいだろう。だから、学者や科学者が自分自身や事物・物事について、また主観・客観、主観性・客観性について、さらにまた事実・現実・真理について何を語ろうとも、そういう意見もあるのかと軽く聞き流しておくのが賢明というものだ。そして、自分自身や事物・物事の究極の真性などが、もしもあなたにとつて問題になるとすれば、そんなとき、学問や科学を極めようとしたりその理論やことばに拘泥したりして時を費すのは、恵みの時の無駄使い。そんなものはすべて一律に、火のなかに投げ込ま

ればすべて跡形もなく消え去る人間のことにあまりにも頼りすぎてゐるからだ。こんな事実なら、あなたとわたしを取り巻いてゐるこの透明な大気がこのうえなく明らかに証明してゐるではないか。

伸びる新芽のように

光、風、水、大地に

身を委ねる者にとつて、

人間のことはなどどうして必要なだろう。

手のひらで風と語りあい

せせらぎの語る声に聞き入り

小鳥のさえずりに瞑想に誘われる者にとつて、

人間のことは必要などどこにあるだろう。

人間のことは、もともと、それに頼らなくては

学び知ることができない「鈍器」たちのためにこそある。

人間のことはなどなくても学び知ってゆく者にとつては、

存在とはすべて、すでにことばではないだろうか。

光は、万物を現出させる光のままに

風は、旋回する風のままに

水は、流れる水のままに

大地は、万物を支える大地のままに

すでに、ことばであるだろう。

人間が自分自身を見出し、自分自身を生きる場所には

存在するがままにことばであるものたちが

集いあつてゐるではないか。

そのことは私たちはすべて、人間のことは似ても似つかぬ
靈妙な、

「光あれ」（『創世記』一の三）とか

「地は草を芽生えさせよ」（『創世記』一の二一）とかの

神々のことはと親子のように親密な、

聖なることばではないだろうか。

光や風や水や大地がすでに聖なることばであるなら、それらに身を委ねきつて成育してゆく者は、「主の口から出るすべてのことばによつて生きる」（『申命記』八の三）イエスのようになるだろう。つまり、彼もまた、それ自身がことばであるような存在であるだろう。光や風や水や大地の集いあう場に生きる者は、光や風や水や大地に不足することはない。だが、それらの外に迷い出てしまう者には、存在するがままにことばであるようなことが、欠乏する。でも、迷い出る者たちはその欠乏に気づくとはかぎらない。というのは、迷い出るのは、舌がおしやべりに夢中になつて、絶え間なく語りかける光や風や水や大地などには耳を傾けようとしなない者たちか、それら存在することばたちにひとまず耳を傾けても、そのことばを聞いているうちにいつのまにやら耳が居眠りをはじめ舌が眼をさまし、結局は聞くよりもしゃべることに懸命になつてしまう者たち——たとえば、存在のことばにやたらと解釈・注釈をほどこし解説・解読を提示したがる人々——か、いずれかだからである。いずれにせよ、まことに、「舌を制御できる人は一人もいません。舌は、疲れを知らない悪で、死をもたらす毒に満ちています」（『ヤコブの手紙』三の八）とあるとおりだ。学者や科学者もまた、舌（おしや

べり」と文字と人間のことばと、これら三種のジンギを活用して「顔に汗を流して」(『創世記』三の一九) 日々の糧を獲得してゆく手合いなのだ。彼らもまた、風に吹かれ、光をあび、水を飲み、土を踏む。だが、日々の糧の思いわずらいにはじまる無数の思いわずらいの連鎖を辿る者たちの耳に、風や何かが存在するがままに語りかけることは、聞こえない。存在であるようなことばに身を委ねきつてそのことばに生きてゆく者の眼には、そのことばの外に成立する学問や科学の理論やことばは、それこそ、子供だましこどもだましの宝石いしみたいに見える。学者や科学者は、生彩のない単調な幻影の集いあう場で、推論というひとすじの糸を慎重な手つきでたぐろうとする。彼らは、そんな推論の結論として案出した多種多様な仕掛けのもとにデータを蒐集しそれを、赤いビー玉、青いビー玉、緑のビー玉、大きいビー玉、小さいビー玉、……といった具合に、名を付して分類する。これだけでも、ここに、知識と称されるものの輪郭が浮かび上がってくる。だが、これだけではまだ粗雑すぎるだろうか。それなら、さらに、分類を可能なかぎり緻密かつ網羅的なものに仕上げてゆくと同時に、そうして得られる経験的な諸概念の間の関係を、論理関係や因果関係や事物・性質関係や相互関係のもとに整理して、あるいはそこまで論理化する必要があると言ふなら、同時性や継起性や並存関係のもとに整理するにとどめることになるが、ここまでやればもうかなり立派な学的知識、科学的知識ができあがる。残るは体系化の作業だが、学問や科学を成立させる諸局面のうち、体系化の局面はもつとも容易で、工夫をすれば、すべて結局は二分法とその反復でかたがつく。いま述べてきたような作業はさほどむづかしいものではない。というのも、この種の作業は、謎めいたものには手を

ふれぬよう、そしてそのかたわらを通り抜けてゆくように仕組まれているし、分類されるべきデータがきわめて多種多様であるとしても、学問や科学が扱う多様性は、データを蒐集するための仕掛けの樣態の多様性とデータを分類するさいの基準の多様性を超えることは決してないし、しかもその仕掛けや基準がどんなに奇抜・卓抜・独創的であつても、それは、あの篩ふるいのように目の粗い人間のことはの約束事がわかるほどの者なら誰にでも原理的には理解可能なものであり、それゆえ、学問や科学が扱う経験の多様性が人間のことばの彼方にまでおよぶことは、そもそもありえないことなのだから。

——なるほど、ルーミーが語り、あなたが繰り返したように、いまでも学者や科学者たちは、自分自身という存在や、事物・物事の究極の真性への問いを問おうとはしない。しかしそれは、その種の問いが無意味であると証明されたからではなかったか……。その辺りの事情なら……いやそれどころか一切の形而上学的な問いかけを学的に、科学的に無意味なものとして証明するその証明は、その仔細を、わたしなどよりあなたこそ十分に研究したのではなかったか。学問や科学は、おのれの領域を制限し、その領域を超える問いかけを断念することによつてこそ、正確さや実証性や客観を具えた信頼できる知識の体系としての地位を得ているのではなかったらうか。学問と科学は、或る種の問いを問いとして認めないというそのことによつてかえつて、人間のために、人間が自分自身にふさわしい真理を見出すことのできる領野を開いているのだと、わたしは思う。そしてまた、学問と科学は、さまざまな形而上学的な問いをひとまず排除したとはいえ、新たに獲得した、人間にふさわしい真理にも

とづいて、排除したさまざまな問いや、それぞれの問いに対する決して一致することのないさまざまな答えについて、それらがどのようになして生じるに至ったのかという側面に即して十分納得のゆく説明を提供しているのではないだろうか……。――

あなたの言うことはとてもよくわかる。あなたのことを貫く思考は、わたしの記憶に語りかけ、わたしの記憶を呼び戻すから。しかし、それにしても、呼び戻された記憶やあなたのことは、わたしに訪れた新しい光に照らされて、いま、何と色褪せて見えることか。自分自身という存在や、事物・物事の究極の真性への問いを抑制することによって獲得できるようになったとあなたの言う真理、つまりあなたの言う「人間にふさわしい真理」とは、実は、火に投じれば消滅する意見のごときものことだ。あなたの言うことはとてもよくわかる。あなたはわたしの記憶に語りかけるから。でも、あなたには、わたしの言うことが、わかっていないようだ。わたしの記憶にばかり語りかけていまのわたしやわたしたちにいま吹くこの風と語りあおうとはしないあなたには、わたしの言うことが理解できていないようだ……。……あなたをあなたの意見という狭隘な先入見のもとにとどまらせているのは、あなたの苦痛、いや、心細さとか不安とか恐怖とかの姿をとった予期された苦痛ではないだろうか……。そのような不安・恐怖・苦痛が、あなたに、自分自身という存在や、事物・物事の究極の真性への問いをあきらめさせているように、わたしには思えるのだが……。たしかに、多くの場合、人間が真理に気づかないのは、人間がひそかにそれを抑制するからである。それを抑制するのは、真理がつねに真理への問いという火

で試みられ精練されたものであり、たいていの人間はこの火に不安と恐怖と苦痛を覚えるからである。あなたの場合はどうなのだろう……。端的に語ろう。あなたは、真理に関して虚偽を語る。その虚偽をおおい隠すように、「人間にふさわしい真理」と言う。そう言うことであなたは、人間と真理をともに救済したつもりで、真理を抑圧し人間を抑圧している。あなたの言う人間は、真理にふさわしくないし、あなたの言う真理は、人間が自分自身をたしかめるのを妨害する。人間と真理について語ろうとするなら、また真理への問いを学的に無意味であると断定しようと思うなら、さらにまた主観とか客観とか、事実とか現実とか、証明とか信頼とかについて何かまともなことを語ろうと思うなら、あなたは、いま、あなた自身に對してもっと過酷でなければならぬ。あなたのなかの柔和さが、あるいはとりちがえられた自分自身へのとりちがえられた厳格さが、あなたを、人間と真理に向かう思考に対する圧制者にしてている。だが、あなたに、わたしの言うことがわかるだろうか。人間の本性などというものがあなたを「人間にふさわしい」領野に閉じ込めているのではない。あなたの弱気と臆病があなたの思考を牢獄に閉じ込めているのだ。それだけではない。あなたの日々のおこないの一つ一つが、あなたのまわりの人間をその牢獄に引き入れようとしている。まことに、臆病な人間はつねに自分自身とまわりの人間に対する抑圧者である。あなたもまた、実際、サファイアでありルビーであるような存在のことばに傾く二つの耳を不安気にふさぐ二つの手ではないだろうか……。

真実、宝であるのは

風や水や植物たちの息、……

これらは

それに耳を傾け、それを生きる人間に

その人自身を気づかせてくれる——貴重な音信。

その音信を受け取った無数の神的な瞬間

そのたびごとに、わたしは

無限者へとささげられていた。

いま、無限者は燃え上がる火のようだ。でも、わたしは

途方にくれることはない。

途方にくれるわたしが消えて、わたしは

自分自身が燃え上がる火のようだ。

風とわたしがふれあう場所で、無限者が火のように燃え立ち、風とわたしはその火の輝きとなった。風とわたしは、いま、燃え上がる大火のなかの二つの小さな炎のようだ。無限者と風とわたしとは、いまではもう、同じ一つのものではないだろうか。

——あなたは語りつづける。だけど、わたしの耳に、あなたのことばは無分別に聞こえる。理屈もおらない。あなたのことばは愚か者のことばのようだ。ささげものにほかならないあなたが、「わたし」などと言う。ささげものにほかならないのに、いまさらどんな「わたし」があると言うのか……。いや、それだけではない。無限者であるなら、すべてのものを、天にあるものも地にあるものも海にあるものも、すべてをわがものとしていいるだろうに、いまさら

あらためて、無限者へのささげものとは……。風もあなたも存在であるかぎりは無限者のものであるというのに、その無限者にまだ所有していないものでも残っていたかのように、あなたは語る。しかも、「わたし」という存在がささげられるとは……。誰が一体、そんなものをささげると言うのだろうか……。あなたの言うその「わたし」が、か……。ささげものであるそのあなたがそのあなたをささげると言うのか……。では、そのとき、あなたはあなたの部分をささげるのか、そしてあなたのもう一方のささげる方の部分はささげられずに手もとに残されるのか、それならあなたがあなたをささげるその無限者は、無限者ではないことになってしまうのではないか、……。それにまた、あなたはあなた自身のことを一概にささげものとは言えなくなってしまうのではないか、……。あなたの語ることばは幾重にも愚かで無分別なことばのように、わたしには聞こえる。――

わたしに吹きつけるこの風との語らいの促しのままに、わたしは、分別の彼方に踏み込んでしまっている。そして分別の彼方には、新しい光が、新しい眼が、ある。その眼が見たものをわたしはいま語ろうとしているのだが……。しかし、わたしをとりちがえて、いまのこのわたしではなく、わたしに関するわたしの色褪せた記憶にばかり語りかけるあなたにとって、わたしのことばは、切れ切れの断片、意味をなさないことばの破片のようにひびくのだろうか……。そして、これらの断片を総合し凝集する一つの形姿があなたには見えないのだろうか……。先にわたしは、その形姿を、つまり形なく姿のないその形姿を、凝集と散乱、旋回と流動、浸透と拡散、と呼

んだ。いままたわたしは、炎と言ひ、火と言ふ。あるいはわたしは、遊戯と言ふこともできよう。遊戯とか火の比喩を用いずに、わたしは無限者のことを語ることができない。……比喩、……そう、わたしは比喩と言おう。

無限者にささげられたわたしは、わたしによつて
ささげられた。そのとき

ささげるわたしもささげられるわたしも

わたしがわたしをささげる無限者のうちにあり
無限者の遊戯のなかにある。

いや、ちがう

のなかに、ではなく、

ささげるわたしもささげられるわたしも

無限者の遊戯である。

存在が存在へと回帰する宇宙的遊戯とともに
わたしという名を負う者は消滅する。

ありとあらゆる存在が

各々のそれ自身である同じ一つの無限者へと

踊りながら還つてゆく。この遊戯とともに
名を負つたすべてのものが消滅する。

いまは、

一切の存在が一切の束縛から解き放たれて
宇宙はその原初の形姿にたち帰る。

いまは、

思想のかげ一つないこの透明な空間の

あらゆる場所で、絶え間なく
供犠が成就する。

思想のかげ一つないこの透明な空間をおのれの遊戯の場とする無限者は、ありとあらゆる存在を、天と地と海にあるものもすべて、そのあるがままに、おのれのうちに包括する。だから、人間が自分自身のことを語ろうとして言うわたしや、そのわたしが名でもって呼ぶ各々の存在が、あらためて無限者のもとにおもむくということは、実は、ありえない。これは一つの大切な知恵である。だが人間は、その想念においてかならず、自分自身を天と地と海にあるすべてのものの外に置きそれを指してわたしと呼び、そのわたしの位置から他のすべての存在を分節化し各分肢に名を与える。でも、そのようなわたしがわたしの不在に気づくときがある。(わたしがわたしの不在に気づくというのは奇妙な表現だ。実は、そのような気づきの事態はとても単純な、しかも一つきりの事態なので、それを、人間のことはで表現しようとする、その表現はかならず奇妙な謎めいたものになってしまう。)……そのような気づきのときとは、たとえば、わたしがわたしに吹きつける風と一つであることに気づくときである。その神秘的瞬間に、わたしという想念や、その想念とともにある想念、つまりわたしとその他の存在との区別の想念や、それらの想念に由来するかぎりでの存在の分節や、その分節に應じたさまざまな名が、すべて消滅する。そして、ありとあらゆる存在が同じ一つの無限者へと解消する。この無限者へと解消してゆく人間の側から言えば、つまり、かつてそしてまたいまも存在すると想念されつつまじくほかならぬこのいま消滅しようとするわたしの

側から言えば、ありとあらゆる存在を包括する無限者が現成してゆくこのプロセスへの気づきは、わたしが自分自身を無限者にささげてゆくことへの気づきであり、わたしやその他の存在たちがすべて無限者のもとにおもむくことへの気づきであろう。でも、いまとなつては、このような言い方は、あまりにも人間的ではないか。むしろ、無限者が現成するプロセスへの気づきとは、自体的には、無限者が無限者自身へと還流してゆくのをその無限者自身が気づくことではないだろうか、……。その還流に、その遊戲に、一切のものがひたされている。一切の存在は、存在である以上は、実は、自分自身へと還流する無限者の靈的な活動であり遊戲なのである。その活動、その遊戲に気づいたとき、わたしは碎かれていた。碎かれたわたしが、こわれたわたしが、無限者へとささげられていた。わたしは無限者へと解消し、無限者の遊戲が実現する。わたしはいま、わたしであることをやめ、遊戲しつつ自己へと還帰する無限者と一つである。わたしはいま、わたしがわたしが無限者にささげると言った。だがこれは、贈与ではない。もともと無であるわたしには贈与できるものなど何もないし、あるいはわたしが贈与できる何かを所有するほどの存在であつたなら、そのような存在であるわたしは、わたしの想念に関わりなくともと無限者のものであつたのだから。こわれる、碎かれる、一身をささげるとは、さらにまた一文無しになる、心が貧しくなるとは、自分自身という存在とか事物・物事の究極の真性とかをめぐつてのわたしの勘ちがいや思いちがいや妄想や想念がすべて消えてゆくことなのだ。ところで、あのバイブルに言う悔いあらためとか神へのたち帰りとかもまた、究極において、万物に存在を寄与しつつ自分自身へと還流する無限者の靈的な

活動への気づき、あるいはまたその活動の現成ないしそのきざしのことではないだろうか……。また、バイブルに言う原罪とは、究極のところ、無限者を見失つた人間がみずから無限者になりかわつて、自分自身を、その他のすべての存在の外に立つと想念するとともにそれらすべての存在をおのれの好みのままに処理する權利を所有すると想念していることではないだろうか……。このような想念が残るかぎりには、神へのささげものなるものも、究極のところ、一切、無効であるだろう。バイブルには、ユダとエルサレムに対して神がイザヤに語らせたことが記されている……。

「ソドムの支配者らよ、主のことばを聞け。ゴモラの民よ、わたしたちの神の教えに耳を傾けよ。

お前たちのささげる多くのいけがわたしにとって何になろうか、と主は言われる。雄羊や肥えた獣の脂肪のささげものに、わたしは飽いた。雄牛、小羊、雄山羊の血をわたしは喜ばない。こうしてわたしの顔を仰ぎ見に来るが、誰がお前たちにこれらのものを求めたか、わたしの庭を踏み荒らす者よ。むなしきささげものをふたび持つて来るな。香の煙はわたしの忌み嫌うもの。……お前たちが手を広げて祈つても、わたしは眼をおおう。どれほど祈りを繰り返しても、決して聞かない。お前たちの血にまみれた手を洗つて、清くせよ。悪いおこないをわたしの眼の前から取り除け。悪をおこなうことをやめ、善をおこなうことを学び、裁きをどこまでも実行して、搾取する者を懲らし、孤兒の權利を守り、やめめの訴えを弁護せよ。

論じ合おうではないか、と主は言われる。たとえ、お前たちの罪

が緋のようでも、雪のように白くなることができる。たとえ、紅のようであつても、羊の毛のようになることができる。お前たちが進んで従うなら、大地の実りを食べることができる。かたくなに背くなら、剣の餌食になる。主の口がこう宣言される。』（『イザヤ書』一の一〇—二〇）。

ささげもののわたし

こわれた心

こわれることで祝福され

こわれることで祝福に気づく

気づくのは誰だろう……

……わたしはもうこわれてしまった。

気づくのは、^{ロゴス・プネウマティコス}霊のことばに生きるわたし

大火のうちなる小さな炎。

大きな火はこのわたしを焼きつくし小さな炎に変貌させて

おのれのうちに受容した。

たとえ神にわたしが

レプトン銅貨一枚しかささげることができなくとも、

砕かれた心、ささげられたわたしが

神の眼にとまるなら

神はそれを喜び享ける。

神が喜び享けるのはただ一つ、それは

砕かれた心であり砕かれたわたしである。

ほかにはない。

たとえわたしが地上の栄華や

いくつもの美しい星々を

神にささげることができたとしても、

心が、わたしが、ささげられていなければ

神は決して喜ばない。

ダビデは歌う。

「神の求めるいけにえは打ち砕かれた霊。

打ち砕かれ悔いる心を

神よ、あなたは悔られませんか。』（『詩篇』五一の一九）。

イザヤも歌う。

「高く、あがめられて、永遠にいまし

その名を聖と唱えられる方^{かた}がこう言われる。

わたしは、高く、聖なるところに住み

打ち砕かれて、へりくだる霊の人とともにあり

へりくだる霊の人に命を得させ

打ち砕かれた心の人に命を得させる。』（『イザヤ書』五七の

五）。

……それにしても、

わたしがわたしを無限者にささげる供儀において

わたしが、自分自身を

無限者に包括されたものとしてたしかめながら

無限者に解消してゆくなら、やはり

供犠の成就とは、無限者が自分自身を自分自身へと
ささげることではないだろうか。

わたしが自分自身において

無限者のようなものでないとすれば

わたしというわたしのささげものなど、どうして

無限者が受け入れよう。

無限者に解消してゆくわたしには、自分自身と無限者との区別がつかない。「神が人とともに住み、人は神の民となる」(『ヨハネの黙示録』二一の三)と記されるそのときの喜ばしい平安、バイブルの言う究極の平安に、いま、風に吹かれるわたしの顔と吹く風と無限者と、これら三つが、気づいているような気分だ……。

——それにしても、あなたは、狂い疲れたりはしないのか。ユダの王マナセに捕えられ二つに割った大木の間にかくまれ、木もろともに鋸で挽き殺されたと言われるあの予言者のことばなど引いて、……あなたが言う人と神がともにあることの喜びとは、不吉なものではないか。それは、喜びというよりむしろ苦痛ではないのか。神に祝福されることは人間にとって不幸なことではないのか。それは、まともな分別をもった人間を、狂わせ、疲れさせ、死に迫いやるだけではないのか。あの予言者の言う、神の得させる命とは、死のことではないのか。……わたしたちに吹くこの風、この風に吹かれるあなたは、いろいろなことを語る。だが、あなたの顔に吹きつけるこの風は、ますますあなたからあなたの正気と分別をさらってゆくにちがいない。あなたの知性は、そう、深く病んだあなたの知性は、

すべての知識を奪われ白紙のようになって、いま、わたしの眼にあなたはまるで白痴のように見える。あなたの言う喜ばしい平安とは狂気じみている。わたしには理解できないし、理解したいとも思わない。吹く風のこの快適さならわたしにもわかる。ちっぽけなものだが、それはたしかに一つの喜びであろう。それをあなたが貴重と言うならわたしもそれを貴重と認めよう。だが、あなたはこの快適さにとどまらず、おそらくこの快適さから無限者や神へと推論……いや、跳躍する、……まるで出鱈目に。あなたは、分別の彼方に出たら、新しい光と新しい眼があつた、と言うが、そんな調子のいい出たら眼を、わたしは信じない。あなたはいま、尋常ではない。あなたは、あなたが正気であつてはじめて正しく有効に活用できるあなたの全エネルギーを、瘴気のように吹きつけるそのあなたの風に奪い取られてしまうだろう。——

不吉が大吉

死ぬが生きる

白痴が知性

瘴気が正気

知性が何であれ正気は何であれ

考えるということがほんとうに成立するのは、つまり

考えるということが現実化し、

ことばが現実の写しや空想ではなく

あくまでも現実であるのは、……

考えることとことばが

知性だとか正気だとか、意識とか分別とか

人に名をもつて呼ばれるものたち一切から解き放たれて、

……そう、ちょうどいまのように、こんな風に

ひたすらにわたしがわたしの表層に迫り出して

さらに表層から外へ外へと、他者へ他者へと

伸びあがり、こうして

わたしが風との契りを想い出すという

そのときかぎりでのことでしかない。

風をちぎり風にちぎられ、風に吹かれて

気のふれた、そんな思考やことばだけが

現実だ。

そよぐ大氣にふれて気がふれる

そよぐ大氣にふれられ気がふれる

……でも、人が自分自身を生きているということは

心がそよぐことではなかったか、また

気がふれることではなかったか。

砕かれた心、こわれた心は、無限者を讃え、

そよぐ心、気のふれた心が、無限者に生きる。

風とわたしがふれあう瞬間、そのふれあう断面は、……いや断面とはすなわち接触面のことだが、その接触面は、誰のものだろうか、……。その接触面は、風にふれるわたしの表層であり表面であり限界であり端であり隈であるからわたしのものであり、わたしが風とは別の存在であるとすれば、わたしのものであるその接触面は風のものではないのであるが、しかし同時に、その接触面は、わたしに

吹く風の先端であり限界であり隈であるから風のものであり、風がわたしとは別の存在であるとすれば、風のものであるその接触面はわたしのものではない、ということにもなる。わたしのものがわたしのものではなく、風のものではないものが風のものであり、さらにまた、わたしのものが風のものであり、風のもものがわたしのものであるという事態が成立するなら、わたしと風は、わたしと風がふれあうその接触面において、つまり限界であり端である同じ一つのその接触面においては、たがいに異なる存在でありつつそれぞれがそれぞれにとつての他のものでもある。これもまた奇妙な表現だ。一般に、接触面や、境界線や、接点は、人間のことはでは表現しきれない。しかしまた、接触面や境界線や接点を援用しなければ、人間のことは何一つ語り出すことができない。というのは、人間のことはいつでも、そのような面・線・点を組み合わせることとで、さしあたっては無限定なものを限定し、さしあたってはひとつながりのものを分節化し、さしあたっては渾沌としたカオスを秩序を導入し、こうして人間に知識を得させるからである。だが、と言うより、だからこそ、人間のことは、そしてまた人間のことはに由来するいかなる知識も、つまりいかなる分別知も、その知を生ぜしめる限定・分節化・秩序づけということばの活動が成立するために不可欠なあの接触面・境界線・接点にまではおよばないのである。差異化をとおして意味を創造する人間のことは、そのような接触面・境界線・接点に、あらためて限定・分節化・秩序づけの働きを行使することはできない。だから、そのような面・線・点とは、人間のことはでは表現しきれない。それでもあえてそれを語り出そうとするなら、或るものとそれとは異なる或るものとがそれぞれ、

それぞれにとつての他のものでもあるという事態の成立する同じ一つのものでも言うしかない。しかしそのように言ってみても、異とか他とか同とか一とかの各々が、それ自身と同じであつて、他の三者とは異なる意味をもつとするなら、そのような言い方にもまた、あらためて、問われずして不可欠なものとして前提されたあの接触面・境界線・接点がすでに引き入れられているのである。学問や科学の理論やことばにしても、それがどれほど精緻を極めたものであつても、それが人間のことはに捕えられており、あの面・線・点を援用してはじめて意味をもつものである以上は、やはり中途半端なものでしかないし、詩人の感性がどんなに澄みきつたものであつても、その語ることばが人間のことはであるかぎり、面や線や点という謎を秘めた無数の濁りを残すことになるのだ。なるほど、たしかにわたしたちは、すぐれた詩や斬新な学説やかぎりなく自分の生に密着した無名の境地から発せられるありふれたことばにふれて、それらのことばに透明感を覚えることがある。すなわち、日常的な言語生活（社会生活）の営みのなかでおのずと沈澱し固まり前提されるようになったあの面や線や点の一定の組み合わせが突如、組み変えられ、これによつて世界が、以前は見ることのできなかつた光景を呈することがある。しかし、これは構造の解体と再編であるにすぎず、ブラシであるにすぎない。つまり、ただのことば遊びだ。根本的には、ここに、新しい出来事は何も生起していない。組み変えと再編によつて、以前はあの面や線や点という謎を秘めた濁りのあつたその場所から別の場所にその種の濁りが移動させられただけのことである。分別の眼にはじめ濁つていた場所が透明になれば、分別の人はそこに透明感を覚えるだろう。しかし、この透明感は、

別の場所に押しやられた不透明な濁りに依存しているのである。つまり、人間のことは、そのことばでは決して解明し尽くすことのできないあの面・線・点をつねに前提しているのだ。或るものがそれとは異なる或るものとふれあう接触面・境界線・接点は、人間のことばが語りうる極みのさらにその彼方にある。……だが、……それにしても、……わたしたちがいま大氣に包まれていること、いま風が吹いてくること、そしていまわたしたちが光をあび、足で地を踏みゆつくり歩いてゆくこと、……人間のことはで言うならこんな粗雑な表現しかできないにしてもたとえそのように表現されるわたしたちの生そのものであるこれら無数の経験は、すべて、一つ残らず、ふれられふれることの無数の様態ではないだろうか……。別様に考えることができるだろうか……。……もしできないとすれば、わたしたちの生は、わたしたちのものであると同時に、大氣や光や大地のものでもあるわけだ。だからもう、その生を、わたしたちのとか、わたしのとか、限定するのはやめよう、……その生は、そんな限定の彼方で営まれているのだから。……その生は、人間のことばの語りうる極みのさらにその彼方で営まれているのだ。では、その彼方で営まれている現実の生を語ろうとすると、どんなことが生じるだろうか、……現実であるようなことばを語ろうとすれば、人間のことはこわれるしかない、……人間のことはに依存する分別は狂うしかない。……また、現実の生を生きる者は、人間のことばで語られ分別で知られる生なるものに死んでゐるにちがいない。

風に吹かれたら
快いひびきが聞こえてきた。それは

風がわたしに語りかけることば。それは切れ切れで、しかも

人間のことばで言うなら意味などなかった。

でもわたしは、どんな意味深い人間のことばによりも

風のことばの快いひびきにひかれた。そこでわたしは、その切れ切れの無意味なことばを、

良い穀粒を噛みしめるように

じつくりと噛みしめた。

わたしの歯は、そのことばを

こまかに砕き、つぶし、……

ミルクのようになったそのことばは

わたしの身体のすみずみにまでしみとおっていった。

甲殻類の甲胃のように硬い外皮と化していた

わたしの分別が、わたしにはもう

生を保護するためのものではなく

生を疎外し抑圧し窒息させるもののように思われてきた。

すると、わたしの身体は一層、風に向けて開かれ、

風は風で一層多くのことばを、やはり切れ切れの謎めいた

ことばを

わたしに語りかけるようになった。

(わたしたちは親密になった。)

いまは、風とわたしが合一し、わたしたちが一個の渦と化したこの場所から

風でありわたしであるような、また

風でもなくわたしでもないような、靈妙な

生の波動が世界にしみとおってゆく。

世界はいま、成熟し、よく熟れた

黄金の稲穂が風に波打ちうねるようだ。

注

(一) 緒方正人・語り、辻信一・構成、『常世の舟を漕ぎて——水俣病私史——』、世織書房、一九九六年、一五四—一五五頁、を参照せよ。

(二) 町田宗鳳、『エロスの国・熊野』、法藏館、一九九六年、二一九頁、を参照せよ。

(三) ルーミー、『ルーミー語録』(井筒俊彦著作集11)、中央公論社、一九九三年、四二—四三頁。